

おわりに

2021年9月5日、13日間の東京パラリンピックが終焉を迎えた。日本代表選手団は、金メダル13個を含むメダル総数51個という大活躍で、多くの皆さんに人間のもつ可能性を伝えてくれた。とりわけ、視覚障害アスリートは7競技53名が参加し、金2、銀5、銅7合計14個（陸上競技のユニバーサルリレーは含まず）のメダルを獲得した。リオ大会の雪辱を期したり、初出場の勢いを発揮したり、躍動する姿はガイド・タッパー・コーラー等の視覚障害アスリートのサポーターにも目を向ける契機となった。このような大活躍の陰に、我々の地道な活動も貢献できたのであればこれほどうれしいことはない。

あらためて、多くの執筆者の協力により、本書が校了できたことに対し、心よりお礼を申し上げる。

本書は視覚障害者のためのスポーツ指導を全般的に取り上げた書籍である。これまで、同種の書籍は国内では見つけることができなかった。そのような中、視覚障害者スポーツ関係者にとっては、視覚障害者の発達段階、ライフステージを踏まえたスポーツ指導の書籍の出版は関係者の悲願であった。

この2020東京パラリンピックを契機に、何がレガシーとして残るかと考えたとき、公共機関のバリアフリー化、点字ブロックの敷設のようなハード面のバリアフリーに目が行きがちであるが、ソフト面のレガシーも残していかなければならないと思案していた。そのような中で、本書を企画し、新型コロナウイルスの感染拡大下で、足掛け2年を経て多くの関係者にご協力いただきここに出稿できたことは、感慨深いものがある。

改めてレガシーとは残るものではなく、残すものであるという言葉思い出す。本書の編集を通じて、レガシーとは、意識して作り上げていかなければ残すことができないということを再認識する機会ともなった。

視覚障害者のスポーツにおける諸課題が、本書ですべて解決できるわけではない。しかし、本書が1つの契機となり、次なる指導方法の改善、提案が進めばと願っている。

本書で論じられてきた視覚障害者スポーツにおける諸課題は、視覚障害者に対する理解のある指導者が増加することによって、多くは解決していくものと考えている。視覚障害者及び視覚障害者スポーツに関する理解を深めるために、本書をご活用いただければ幸いである。

また、本書が視覚障害のある子どもだけでなく、スポーツが得意ではない子どもたちへの指導上のヒントを提供するとも考えている。そのような活用法もご検討いただきたい。

最後になるが、本書の出版にあたり、粘り強くお力添えをいただいた筑波大学出版会と編集委員会の方々に衷心よりお礼申し上げる。我が国唯一の国立大学附属の視覚特別支援学校を有する筑波大学のお力をいただき、東京 2020 パラリンピック競技大会を契機として視覚障害者スポーツの歴史に着実な足跡を残すことができたと思っている。

本書の評価はお読みいただいた皆さんの判断を仰ぐことになるが、たとえ小さな一歩であっても、着実に前に踏み出すことができたと考えている。

微力ではあるがこれからも、視覚障害者スポーツの発展のため、このようなご縁を大切にしながら、様々な取り組みを推進していきたいと思っている。

2021年9月

河合純一、宮本俊和